

## 魅力ある建設業への再生

Revitalization of appealing construction industry

特集担当主査：佐久間清文

特集企画担当：稲田憲武、大窪一正、鈴木三馨、永禮大

建設業は、社会インフラの整備・維持の担い手であると同時に、地域社会の安全・安心の確保を担う国民産業であり、市民生活・産業基盤の提供や、災害の多いわが国の地域づくりにおいて大きく貢献していることに疑いの余地はない。

一方で、社会インフラ環境の充実化、高齢化・人口減少局面、労働環境・環境意識の高まりに伴い、かつて『黒部の太陽』のように映画化までなされた若者に人気のあつた建設業は、いつしか3K(きつい、汚い、危険)の代表のようにとらえられ、そのイメージは払拭しきれない状況にある。

さらに、わが国全体の労働人口の減少や技能労働者の担い手不足に直面し、建設業が持続的に成長するための改革は待ったなしの局面を迎えている。それに対して第4次産業革命(IOTやAI等)の推進を軸とした成長戦略の柱の一つである、「快適なインフラ・まちづくり」を実現するために国土交通省が主導する「i-Construction」の取組みの下、建設業は「生産性向上と魅力ある建設現場づくり」のための技術開発や、さまざまな取組みを実施しているが、建設業

が果たしている役割、地域との協働や貢献、建設現場の魅力や先端技術の紹介などを、建設業に携わる者自身が社会に対して十分に発信できているとはいいがたい。そこで、本誌2016年1月号において「ゼネコン新時代」と銘打って、建設業が今後進むべき方向性や技術イノベーション、新たな付加価値創造の方向性などを紹介した。

本特集では、改めて建設業の役割と魅力を再確認し、特に若い世代や一般市民へ広く紹介することを目的に、明るく読みやすい話題で構成する。

はじめに日本建設業連合会の宮本副会長・土木本部長より、建設業が置かれている現状と魅力ある産業となるためのビジョンを俯瞰的に概説いただく。2017年ノーベル物理学賞の受賞で記憶に新しい「重力波」を、国内でも観測するための研究設備「KAGRA」を指揮する東京大学の大橋教授に、宇宙物理学と建設業との接点や共通して抱える課題、一般の市民や若者へ魅力を発信するためのヒント、一市民の視点から建設業への期待を、インタビュー形式で伺う。

次に、座談会形式で次世代の建設業を担う中堅世代の技術者に、ハード・



写真1 多くの市民に魅力を放つ黒部ダム (提供: 関西電力(株))

ソフトの両面から建設業が大きく変わった点とさらなる改善点を多面的に語っていただく。特に、登壇者の多くが過去の大災害との関わりがあったことから、建設業に従事する当事者として、また一市民として建設業の魅力と重要性に対する熱意が語られている。

事例として、最初に国土の保全上必要不可欠な地域の守り手である地方建設業の地域貢献について紹介する。自然災害発生時の復旧において、自衛隊救助の報道を目にすることは多いが、地域建設業も防災協定に基づき災害復旧の初動段階から大きく貢献していること、また、災害の発生メカニズムや防災対策を一般市民にわかりやすく伝える地域防災活動の取組みを紹介する。

社会資本整備の担い手としての事例として、人目に触れることの少ないダムの建設が地域にとって果たす役割、地域住民のものであることを建設段階から協働して理解を深め合う取組みについて紹介する。

多くの業界が工場見学を通して、科学技術や業界の魅力を発信するとともに人気を博している。建設業においてその役割を担う情報発信源は建設現場

であり、先端技術のショーケースといえる技術研究所である。主に大学や公共機関が研究開発を実施する欧米と異なり、企業レベルで研究開発を実施することが多いわが国の建設業の技術研究所が果たす役割や、その魅力を幅広い世代に発信する事例を紹介する。

多様化する社会ニーズや高度に複雑化・専門化する技術に対応するため、建設業が異業種と技術提携することで技術面・環境面での課題を解決し、「フクシマ」の復興へ適用した事例を技術提携先の視点から紹介する。

最後に、「より快適な、より豊かな社会インフラ」の構築に向けて、建設業が提供できる夢のある明るい話題として、海上への未来構想都市建設への取組みと、宇宙開発の現状と建設業の関わりや、建設業への期待を紹介する。

社会インフラは意識しなくても、当たり前のものでして日常生活に密着して存在することはもちろん素晴らしいが、本特集を通して社会インフラの構築と維持に貢献する建設業の存在と、その魅力が少しでも多くの市民に正しく伝わり、われわれ自身も建設業の新たな魅力に気づくことができれば幸いである。